植 物 胃 石 の 1 例

愛媛県八幡浜市市立八幡浜病院外科 (医長 鎌田正勝博士)

松 岡 昇 三

A case of phytobezoare

Shozo Matsuoka

Department of Surgery, City Hospital Yawatahama, Ehime (Director : M. Kamada, M.D.)

I 緒 言

果実殊に柿実の生食に因つて生ずる植物胃石は比較的稀な胃内異物とされているが、最近経験した1例を報告し、文献的考察を試み度い。

II 症 例

50才、農家の主婦。

主訴。腹部腫瘍及び時折発来する腹痛。

既往歴、家族歴に著患を認めず。

現病歴。初診日(昭和30年10月17日)の約10日前に2日間に豆柿(渋の多い野生種)10数個を食べた。翌朝嘔気を来し、心窩部に膨満感と鈍痛及び窩部から上腹部に亘つて膨隆を伴い、上腹部に固い腫瘍を触知した。来院の約5日前に某医に胃腸障碍、他の某医に胃癌であると診断された。尚同時に3人の子供と夫が略々同数の豆柿を食べたが無症状に経過している。

現症。全身所見 体格中等、羸瘦著明、皮膚乾燥、胸部及び四肢脊柱共に正常。

腹部局所所見：全般に軽度陥凹。視診上他に異常所見なし。触診所見：臍部に板状硬、表面平滑な2個の腫瘍を触知する。この腫瘍は鷲卵大と超鷲卵大で輪廓鮮鋭、移動性極めて大で下は臍高に於て、右乳嚢線上肋骨弓下3横指径まで、左は左乳嚢線上肋骨弓下、上は略々剣状突起に到る範囲内である。呼吸性に固定可能で圧痛を証明しない。双手的に触知不能。両側腎及び脾は触知されない。レントゲン所見で単純撮影では陰影を認め得ない。バリウム造影像では、幽門部に近く大彎側から小彎側にかけて陰影欠損部を認める。触知

し得た他の1個の腫瘍には術前のレ線写真では気付かなかつた。(第1図)。

血液理化学的所見では著変を認めない。

糞便内潜血反応は試験食後ベンチジン反応陰性尿所見正常。

胃液検査：Katsch-Kalk 氏法で80分目に遊離塩酸の最高濃度58、総酸度65を示し、分泌量略々正常。

以上レ線所見より胃腫瘍の疑診の下に昭和30年10月27日開腹術施行。

手術所見：上腹部正中切開によつて開腹。胃は外觀上著変なく、胃内にはレ線撮影で証明された幽門部の腫瘍の外に、これに続いて口側に更に1個の腫瘍が触知される。他に病的所見は認められず、茲で胃内異物なる事判明し之を摘出した。

摘除標本所見：表面粗、暗緑色、脆弱な植物性胃石で、 $6 \times 3 \times 9.5 \text{ cm}$ 、10gと $3 \times 5 \times 5 \text{ cm}$ 、80gの2個。表面及び割面には柿の果皮の小片が認められる。酸臭を有している。食品分析は行わなかつた。

患者は術後の経過良好で16病日全治退院し現在健康である。

III 考 按

1854年 Quain が剖検例に於て椰子の実から出来ている胃石を報告し、本邦では明治42年三宅が藺草によるものを報告したのが始めて、以来我が国では柿実結石が屢々発見され100例以上に及んでいる。その他グミ、桑科オホイトビ、大豆及びその皮殻、ドン栗、大根漬の小片等によるものもある。

生成機転に関しては機械的成因と化学的成因とが挙げられている。その中果実結石殊に柿実結石は可溶性シブオールが胃内の酸にあつて直ちに不溶性に変わり凝固析出するもので、胃酸度に応じて柿渋の沈澱量が増加し、胃内容の排出遅延は結石形成を促進する。従つて屢々過酸症を伴う事があると云われる。かかる変化は概ね食後1昼夜以内に起り結石の核若しくは結石が形成される。

一般症状としては多くは食後数時間乃至10日以内に悪心、嘔吐、腹痛等胃腸症状を来す事が報告されている。

文献上術前診断は可成り困難な様であるが、斯かる疾患の存在さえ考慮に入れているならば決して困難なものではなからう。

治療法に就いても諸説があるが、形成された腫瘍が早期であれば、多量の重曹投与で次第に排泄された例、莨菪剤、緩下剤の効果的であつた例等も報告されている。従つて胃石の治療に当つては一応内科的に観察し外科的処置は適応に慎重を期すべきであると云われる論拠でもある。

結石の大きさも370gmから以下種々の報告がある。

本症例の症状発現時間は短く、一般症状も上述の諸説に一致するがレ線写真の看過に因つて胃腫瘍と誤診した。

IV 結 語

大量の渋柿を食べた翌日より胃症状を発し、胃腫瘍の疑診の下に開腹し、2個の柿実胃石(120g及び80g)の発見された1例を報告した。

稿を終るに臨み、御校閲を賜つた恩師青柳安誠教授、岡宗夫教授並びに御指導を賜つた鎌田正勝博士に深甚なる謝意を捧げる。

(昭和31年7月22日愛媛県南予地区医学会発表)

文 献

- 1) 荒川久：若越医談，29，33，昭12.
- 2) 青木研一：児科診療，16，2，134 昭28.
- 3) 秋元辰二：弘前医学，2，2，105，昭26.
- 4) 伊藤醇造：広島衛生医事月報，379 昭5.
- 5) 岩月賢一他：臨牀外科，8，8，477 昭28.
- 6) 石川一策：山形県医師会報，6，23 昭26.

第1図 レ線透視

P：幽門部 T₂：腫瘍と誤まれる胃結石

T₁：看過せる胃結石

第2図 摘除標本

T₁：120g T₂：80g

(昭和31年7月22日愛媛県南予地区医学会発表)

- 7) 石川一策：荘内医学会雑誌，189，31，昭26.
- 8) 岩淵恒治：同仁会医学雑誌，18，11，957 昭19.
- 9) 臼井仁朗：成医会雑誌，65，3，119，昭25.
- 10) 浦上愛夫他：児科雑誌，289 大13.
- 11) 梅村六郎：愛知医学雑誌，34，7，昭2.
- 12) 梅村六郎：日外会誌，28，5，昭2.
- 13) 岡本一男他：臨牀消化機病学，4，12，657，昭31.
- 14) 小笠原紀三九他：日本医学放射線学会雑誌，12，8，64，昭27.
- 15) 大関堯他：日本消化機病学会雑誌，50，12，17 昭

28.

- 16) 小島文郎他：日本消化機病学会雑誌，49，10 昭27.
- 17) 亀井奎介他：実験医報 27，7，828 昭16.
- 18) 加藤正知：日本消化機病学会雑誌 43，1，57 昭19.
- 19) 柄沢正一他：医療 5，5，276 昭26.
- 20) 桂佐元他：日病会誌，43巻，地方会号 243，昭30.
- 21) 木下博：日本医科大学雑誌，19，3，452 昭27.
- 22) 岸田隆：荘内医学会雑誌，189，31，昭26.
- 23) 木村男：東北医学雑誌 34，2，183 昭19.
- 24) 木下直幹他：日本消化機病学会雑誌，40，3，139，昭16.
- 25) 小堀純一他：日外会誌，54，10，943，昭29.
- 26) 近藤慧他：外科，16，4，264，昭29.
- 27) 小堀純一他：鹿児島医学雑誌，26，6〜7，191，昭28.
- 28) 坂本緑他：診断と治療，40，7，526，昭27.
- 29) 佐伯正一他：東北医学雑誌，47，1，64，昭27.
- 30) 島津邦造他：治療，34，12，1141，昭27.
- 31) 高瀬武平：十全会雑誌，48，11，2455，昭18.
- 32) 橘亮吉：日本臨牀外科医会雑誌，14，6，170，昭28.
- 33) 十島些久：日本レントゲン学会雑誌，6，4，昭4.
- 34) 畑山勉他：日本消化機病学会雑誌，52，4，161，昭30.
- 35) 稗田穰他：日外会誌，55，4，451，昭29.
- 36) 日影薫：京外会誌，29，1，昭3.
- 37) 日比半弥：日本消化機病学会雑誌，26，5，昭2.
- 38) 堀口道彦：外科，16，1，42，昭29.
- 39) 真野春彦：臨牀外科，9，7，459，昭29.
- 40) 松田昭雄：日外会誌，53，10，834，昭28.
- 41) 松田昭典他：和歌山医学，3，1，57，昭27.
- 42) 宮本輝夫：日外会誌，44，10，1123，昭19.
- 43) 三浦洋：日内会誌，40，11，626，昭27.
- 44) 三木利雄：大阪医学雑誌，3，11〜12，21，昭24.
- 45) 三浦洋他：日本医学放射線学会雑誌，12，3，79，昭27.
- 46) 安田博志：岡山医学会雑誌，69，2，595，昭32.
- 47) 矢野理：臨牀消化機病学，1，5，312，昭28.
- 48) 吉田三毅夫他：臨牀放射線，1，3，196，昭31.
- 49) 和田正士：外科，13，11，571，昭26.
- 50) 六角襄，福島医学雑誌，1，2，75，昭26.
- 51) Donovan, E.J. : Christopher ; Textbook of Surgery.
- 52) Dragstedt, R.L. : Gastroenterology 3, 450. 1944.
- 53) Dragstedt, R.L. : Ann. Surg. 17, 742. 1945.
- 54) Fieber : Gastroenterology 28, 1955.
- 55) Forssner : Arch. klin. Chirur. 100, 497. 1913.
- 56) Garie, Küttner, Lexer : Handbuch d. prakt. Chirur.
- 57) Glover & Barrey : Ann. Surg. 130, 480 1949.
- 58) 中谷隼男：外科全書，19，66，昭32.